

智顗の衆生觀に関する一考察

——『維摩經』觀衆生品の「三十喩」解釈を中心に——

塩 入 法 道

一、はじめに

「衆生」という語は、仏教の基本用語であり、一般的には、「生きとし生けるもの、生命あるもの」という程の意味で使われる⁽¹⁾。また大乘の菩薩の最も重要な徳目として、「下化衆生」「濟度衆生」「教化衆生」「利他」等が主張されている。つまり衆生とは仏や菩薩の教化の対象と考えられている。ところで菩薩が利他行に専念する時、その対象である「他」「衆生」は具体的には何を指すのだろうか、生物全般なのか、人間なのか、人間社会なのだろうか。一方中国仏教では、衆生とは因縁により仮和合した存在であり、実体のない不可得なものであると解釈され、天台智顗においても衆生とは因縁所生の五陰や六根であり、自己自身と切り離されたものではないと主張されている⁽²⁾。とすると自己と衆生とは客觀的存在物として対立的に考えるわけにはいかない。衆生そのものが何を意味しどのような属性を有するものか、という問題とともに、

自己・主体との関係においても単純な解釈では把握し切れないものがあろう。

本小論では、羅什訳『維摩經』觀衆生品の冒頭に列挙される、衆生の三十喩の解釈を通して智顗の衆生觀の特徴を考察してみたい。經典では、

その時、文殊師利、維摩詰に問いて言く。菩薩は云何んが衆生を觀するやと。維摩詰言く、譬えば幻師の所幻の人を見るが如く、菩薩の衆生を觀することかくの如しとなす。(大正藏一四・五四七中)

として、(1)如幻師見幻人、以下(2)如智者見水中月(3)如鏡中見其面像(4)如熱時炎(5)如呼聲響(6)如空中雲(7)如水聚沫(8)如水上泡(9)如芭蕉堅(10)如電久住(11)如第五大(12)如第六陰(13)如第七情(14)如十三入(15)如十九界(16)如無色界色(17)如焦穀芽(18)如須陀洹身見(19)如阿那含入胎(20)如阿羅漢三毒(21)如得忍菩薩貪恚毀禁(22)如煩惱習(23)如盲者見色(24)如入滅定出入息(25)如空中鳥跡(26)如石女兒(27)如化人起煩惱(28)如夢所見已寤(29)如滅度者受身(30)如無烟

之火という三十の譬喩を挙げ、衆生が実体のない空なるものであることを徹底的に説いている。

なお經典はこれに続けて、この空なる衆生に対してどうして慈心が起こるか、という文殊の問いを受け、維摩が菩薩の大慈および悲心、喜心、捨心について述べ衆生教化の根柢を示し、さらに両者の問答をもって生死の根本、衆生身の根本は無住である、という結論に至っている。

因みに支謙訳では十九、玄奘訳では三十四の譬喩になっているが、^③ここでは羅什訳に基づいて考察を進めたい。

これらの譬喩の羅列を一瞥して気付くことは、全体として実体の無いもの、あり得ないことではあるが、それぞれの性格が若干異なっていることである。それは大まかに三種に分類できよう。すなわち第一は(1)から(10)の譬喩で、現象的には存在するように見えるが実体のないものごと、第二は(11)から(15)の譬喩で、三本目の手と同じように言葉で表現することとは可能であるがそれに対応する対象がないもの、第三は(16)から(30)の譬喩で、現実的実際的にありえないこと、である。なお第三類には、仏教教理上の問題や自然現象も含まれ、一まとめにするには多少無理もある。一応の分類である。また經典そのものがいかなる意図でこの順番で譬喩を並べたかについても興味があるが、それは別の問題として、ここではこの譬喩に関する諸師の解釈を見ることにする。

二、慧遠、吉蔵、聖徳太子の解釈

上述したように三十喩には性格の異なりがあり、このことは『維摩經』を注釈する諸師も気づいており、分類して解釈している。智顗の理解と比較するために、まず慧遠の『維摩義記』、吉蔵の『維摩義疏』、聖徳太子撰と伝える『維摩義疏』を検討したい。^④

慧遠の『維摩義記』では、三十喩について次のように分類して解釈している。（なお()・()内は筆者の補いで譬喩の通し番号等を入れた。以下も同。）

文、別ちて二あり。一に(1)〜(15)生空を觀ず、即ちこれ法縁なり。二に(16)〜(30)如無色界色已下、法空を觀ずるを明かす、即ちこの無縁生空觀中に十五句あり。皆な喩を借りて顯わす。前の一喩(1)は別して挙げ別して合す。後の(2)〜(15)十四喩は併せて挙げ總じて合す。これ何らの別あらん。初の(1)〜(10)十句は相に就きて虚を明かす。五陰の相、虚にして神主なきを明かす。後の(11)〜(15)五句は情に就きて無を説く。妄情の取すところにして畢竟じてあらざるなり。(11)第五大、(12)第六陰の如き等なり。（大正蔵三八・四八〇下）

と述べ、後半の譬喩については、

法空觀中也先ず喩、後に合す。喩、別して(16)〜(30)十五言あり。皆な知るべし。（大正蔵三八・四八一上）

としている。すなわち全体を(1)〜(15)と(16)〜(30)に大きく二分し、

前者は衆生空、後者は法空と見、さらに前者について「相」と「情」に二分し、それぞれ実体のないことの譬喩としている。譬喩の性格によって三分類しているが、後半の(16)と(30)については詳しい論述はない。

次に吉蔵の『維摩義疏』であるが、

衆生に二種あり。若は外道、横に計せば、則ち(14)十三人乃至(30)無煙之火の如し。畢竟じてこの衆生なし。二とは因縁仮名衆生、真実の有にあらず。有なりと雖も有にあらず。有にあらずしてしかも有。故に(1)幻師観幻の譬を挙ぐ。幻の如く有にして非有、非有にして色あり。問う、また仮名の衆生を觀するを得るに、(14)十三人の如き畢竟空なりや。答う、仮名は有と雖もしかも畢竟じて有にあらず。非有の義の辺り、またこれを以って喩となすを得る。然るに衆生、畢竟じて非有なりと雖も、宛然としてあり。(14)十三人喩、則ち類を得ず。然るが故に全譬にあらざるなり。：(中略)：(2)と(15)の譬喩は)若し都て無と謂うも、しかも宛然として像あり。衆生の相はこれに類するなり。：(中略)：(16)と(30)の譬喩は)皆なこれ一類に空を明かす。但だ有に滞る者多し。故に備にこれを挙げるのみ。(大正蔵三八・九六五上)

と解釈している。ここで吉蔵は全体を二分し、前者を「因縁仮名衆生」すなわち実体はなくても因縁により仮りに成立している衆生の譬喩、後者を「外道横計衆生」すなわち全くの空としての衆生の譬喩というように理解しているようであるが、「(14)十三人乃至(30)無煙之火の如し」と、十三人のところ

分けていることはどうも釈然としない。(11)如第五大から(15)如十九界はどう見ても一まとまりの譬喩である。引用の後半では、(15)如十九界と(16)如無色界色のところで分けているように見えるので、何らかの錯誤があるのかもしれないが、いずれにせよ全体を通じて仮觀と空觀の譬喩として見なされていることがわかる。

聖德太子撰とされる『維摩義疏』は、

第一に衆生は空なりと觀するを明かす中に就きて、凡そ三十譬を挙げて釈をなす。分ちて三となす。第一に初めの一の(1)幻譬は總じて端を開く。第二に(2)如智者以下に十四譬あり。別門に就きて空を明かす。仮実を別して明かす故に別と言う。(11)如第五大以下は実空を明かす。第三に(16)如無色界色以下に十五譬あり。通門に就きて空を明かす。通じて仮実を明かす故に通と言う。(大正蔵五六・五六上)

と論じている。「一の(1)幻譬は總じて端を開く」とは、慧遠の「前の一喩(1)は別して挙げ別して合す」と同じく經典の説の形式による分類であるので、内容的には(1)と(10)「仮実別明」、(11)と(15)「明実空」、(16)と(30)「通明仮実」の三分類となっている。ただ「別門」「通門」の意味が明確ではない。

以上の三書は分け方や意味づけはそれぞれ異なっているが、全体として衆生が全くの空であること、あるいは実在しているように見えてもそれは仮の存在であり本質的に空であるこ

と、それをこの三十喩を借りて表していると理解していることがわかる。しかし智顗の場合、かなり異なった解釈をしているのである。

三、智顗の解釈

智顗は『維摩文疏』において、まづ

一に(1)～(40)如幻等の十譬に約して衆生の世諦を觀ず。二に(1)～(5)如五大等の五譬に約して衆生の真諦を觀ず。三に(46)～(50)如無色界等の譬に約して中道第一義諦を觀ず。(『正統蔵・通卷二八・二六九』)として、三十喩を明確に三分し、仮・空・中の三諦三觀に配当している。それぞれの説明を見ると、第一については、前に衆生を觀ずるに、(1)～(40)如幻等の譬に約し世諦を破すに就き、自ずから性を体し性空を明かすも、但だ妄りに定性を計するを除き、なお仮名の衆生あることを妨げざるあり。(『正統蔵・同前』)とあり、第二については、

これより(1)～(5)五譬は、即ちこれ二に衆生の真諦空を觀ずるなり。然るゆえんは、上代の諸譬は衆生を觀ずるに、定性なく顛倒所見の仮名幻響の衆生あるを妨げず。今この五譬は、衆生の龜毛兕角の如くにして、畢竟して但だ衆生なきにあらざることを得べからず、また実法なきを明かす。(『正統蔵・通卷二八・二七〇』)と述べ、第三については、

この下の(46)～(50)十六譬（十五喩の誤記か）は、即ちこれ三に衆生の中道を明かすなり。然るゆえんは、中道の法は有にあらざ、空

にあらず。(1)～(40)如幻等の譬の有にあらず、(1)～(5)如五大等の譬の無にあらず。…(中略)…この(46)～(50)十五句は齊しくこれ衆生を觀じて中道第一義に入ることを弁ず。空と雖も真諦の(1)第五大(5)十九界の如きと同じからず。有と雖も世諦の仮有に類せず。空にあらず、有にあらず。よく空有宛然として無色の色の如く、有ならずしてしかも有。諸仏の境界は思議すべからず。故に知る。菩薩、衆生を觀じて仮より空に入り、徹して三諦を見、前の問疾品を成ず。(『正統蔵・通卷二八・二七一』)と論じている。これらのうち、第一と第二は前述した諸師の説とほぼ同様であり、世諦の仮名の衆生と、畢竟空の衆生の譬喩とされている。ところが第三は、衆生の中道第一義諦を觀ずることに対応した譬喩として捉えており、經文の意味からも飛躍した独特の解釈となっている。

そして(46)～(50)の譬喩について一々詳細に論じ、一見あり得ないことでも実はあり得ることの譬喩であつて、(1)第五大や(5)十九界とは全く異なるものであることをさらに強調しているのである。例えば、(46)如無色界色については、小乗では確かにそうであるが、大乘では妙色があるとか、(23)如盲者見色については、盲目の人は物が見えないが物の形を想うことはできるとか、(25)如空中鳥跡については、鳥の飛んだ軌跡は見えないようであつても天眼の人は見ることができるとか、(26)如石女兒については、石女もその果報が転ずれば子をもう

けることができるなどと述べている。(正統蔵・通卷二八・二七
一)

このような解釈は他の諸師にも見られないもので、智顗の衆生觀を考える上で非常に興味深いところがある。

四、小結

智顗の意図はどこにあるのだろうか。彼の解釈ではこの觀衆生品と前の問疾品は從仮入空觀を示す章であるとされる。經典も衆生が実体のない空なるものであることを主張しており、空觀を基調としている。しかし今の譬喩の理解は、実在的側面を意識した中道觀に置かれているように見える。

智顗は、真諦を觀ずれば、第五の大的ように俗諦の衆生を見ることはない。しかし空を体得した真諦に住する衆生があることになる。また菩薩が空を觀ずる場合、二乗と異なり衆生空とともに涅槃空(法空)をも觀ずるのである。ここに真諦を空じた中道が成立するが、中道があるということに計すれば、これもまた疾病である。すなわち中道もまた空である⁽⁵⁾と觀ずるとしながらも、

一往は空觀に入る時、三諦皆空。また皆空なりと雖もまた斷滅にあらず。(正統蔵・通卷二八・二六九)

等と述べている。さらに、真の中道を見る者は一心に万行が具わると言い、

智顗の衆生觀に関する一考察(塩入)

もしよくかくの如く空に入り一時に三觀を具せば、入空を用い初觀の名に当てる⁽⁶⁾と雖も、しかも実に三觀を具せば、即ち慈悲喜捨あり。この品の明かすところの如し。(正統蔵・同前)

と述べ、慈悲の根拠としての三觀を強調している。經典は衆生の空なることを徹底して説き、それを衆生に教え導くことが菩薩の慈悲であるとされているが、智顗は空よりも中に慈悲の根拠を置き、しかも上述したように、そこに仮の面をより強く打ち出しているのではなからうか。智顗はまたこう述べている。

もし衆生を觀じ空に入るの菩薩、以てかくの如くの慈あるとは、これただ空を以て主となし一切智を用いて名を当てるも、しかもそれ実に三觀を具す。また三慈を論ずるを得る。(正統蔵・通

卷二八・二七三)

以上をまとめると、觀衆生品の三十喩のうち、後半の譬喩はあり得ないこと、空であることの譬えとして理解するのが、經典の趣旨であり諸師の解釈でもあるが、智顗はあえて、あり得ないように見えても、実はあり得ることとして理解している。衆生と一切法の問題や、仏と衆生の感応の観点など、彼の衆生觀は多面から考察しなくてはならず、この三十喩の解釈のみの検討では断定することもできないが、少なくともこの部分においては、慈悲の根拠として衆生の有・仮すなわち実在的面に重きを置いているように思えるのである。ここに

智顗の衆生観の一端が隠されてのではなからうか。また彼の実相論にもつながっていく問題をはらんでいるようにも考えられる。

- 1 拙稿「中国初期仏教における衆生義」（『仏教文化の展開』大久保良順先生傘寿記念論文集、所収）参照。
- 2 衆生と五陰・六根の関係については、拙稿「菩薩行における衆生の問題——智顗の六根説をめぐって——」（『天台学报』第三十六号、所収）、「天台智顗における衆生論の展開——その五蘊説をめぐって——」（佐藤良順先生古稀記念論集『インド文化と仏教思想の基調と展開』、所収）参照。
- 3 チベット訳では三十二喻、近年発見されたサンスクリット本では三十一喻になっている。
- 4 『維摩経』の最も早い注釈集である『注維摩詰経』では、羅什・僧肇・道生とも三十喻をまとめて分類解釈してはいない。また慈恩基の『説無垢称経疏』があるが、玄奘訳に依っているためここでは割愛した。
- 5 この点に関しては、藤井教公著「中国隋唐仏教における衆生観」（『印度学仏教学研究』五一巻 第二号）等参照。

〈キーワード〉 天台智顗、衆生観、維摩疏、三観、慈悲

（大正大学助教授）

新刊紹介

大正大学総合仏教研究所編

『靈通寺跡——開城市所在——』

A 四版・三八〇頁・定価六、〇〇〇円
大正大学出版会・二〇〇五年三月

(假), *zhong* (中), *zhi* (止), *guan* (觀), *xiu* (修), *xing* (性), *cang* (藏), *tong* (通), *bie* (別), *yuan* (円), and other Tiantai doctrines in his commentary.

117. One Conception of Sattva in Zhiyi's Doctrine

Hōdō SHIOIRI

At the beginning of Chapter Seven of the *Vimalakīrti-nirdeśa* translated by Kumārajīva, thirty comparisons were pointed out to explain thoroughly that *sattva* is non-existence, namely that it is *śūnya*. These comparisons are classified into three kinds: ① Existing as phenomena but not existing as real bodies, ② Not existing theoretically and ③ Not existing in reality in general theories.

Seeing such a classification, Zhiyi regarded these comparisons to understand respectively: ① Earthly truth for *sattva* (假), ② Essential existence for *sattva* (空) and ③ Existence enhanced from both existences (中). Particularly, he discussed comparisons of type ③ and elucidated that they existed in fact even though they are impossible at first glance. This explanation is a jump from the context of the sūtra and quite unique from opinions of other scholars.

Though the sutra after this part elucidates the compassion of the bodhisattva, Zhiyi admitting the earthly meaning regards the *sattva*, the object of the bodhisattva's compassion, as not a complete *śūnya* and thus finds a foundation for compassion.

118. Zhiyi's Intention of the Secret Teaching 秘密不定教

Kōshi CHŌDŌ

When we look closely into the *Fahua xuanyi* 法華玄義, it is often mentioned that enlightenment can be attained secretly by people with the capacity of the two vehicles.

In the *Tiwei boli jing* 提謂波利經, which expounds the Five Precepts and the Ten Good Acts 五戒十善 to lay believers in the secular world, it is men-